

感性は、能動的な能力

ときに、感性が合うとか、合わないとかというような表現をすることがあります。感性については以前に書いたこともあるのですが、ここではもう少し医療に関係した感性について考えてみます。感性の定義についてはいろいろあると思いますが、桑子は「環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造していく価値にかかわる能力である」としています<sup>1)</sup>。そこでは、外界からの情報をキャッチするだけの受動的な能力ではなく、環境とのかかわりの中で自己の存在をつくり出していく能動的・創造的な能力であり、さらに自己と環境との相対的な関係を把握する能力であり、その関係が適切であるかどうかの価値判断をも含むものとされています。

人間は、感性的存在

人間は古来，理性的人間（homo sapiens ホモ・サピエンス）と表現することで他の動物・霊長類から区別されるとする考えがありました。しかし，こうした近代医学的人間観は，医学を科学とみなし，さらには技術専一的なものとする考えに立ち，その根底にあるのは心身分離の思想であろうといえます。一方では，人間は心身統合体であって感性的存在（homo patiens ホモ・パチエンス）であるとする考えもあります。patiens は，patient（患者）の同源語です。人間とは，また，苦しみ悩む存在でもあり，自らの脆弱性を他人に助けられ護られながら，他人の脆弱性を助け護っている（助け護る人 homo curans ホモ・クランス）ことによって真の人間として生きるのとも考えられます。curans は cure（治す）と同源語です<sup>2)</sup>。どんな人間でも，理性的・知的とよばれ，社会的に強い地位にあっても，特定の条件の下では，いかんともしがたい悲しみに包まれてしまうことがあるのが現実の世の中で

す。その悲しみは、人間に共通する普遍的な部分であって、その部分にお互いに触れ合うことによって癒すことができることが霊性・宗教性のある一面であると岡野は述べています<sup>3)</sup>。

医療は、思いやりの具体的展開

池辺は、「診察は患者の苦しみを我が身の苦しみと感得するような感性を基礎にして成立する。治療は思いやりの感情の具体的な展開である。診察や治療の基礎にあってそれらの原動力となるものが、共感という感性であり、思いやりという感情である」といっています<sup>2)</sup>。

最近、私は「感診のすすめ」を説いています。普通、われわれは現代医学の診察法の基本として5感覚、すなわち視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚を利用することを学びます。しかし、われわれは、これらの5感覚以外の認識をすることができます。すなわち、

extrasensory perception(ESP) と呼ばれるものによって感性相互の接触・交流ということが出来ます。感診 extrasensory examination の重要性の謂れ(いわれ)です。

### 共通感覚

わたしは、最近とても興味のある本を読みました<sup>4)</sup>。

人間の間感性の交流は、ヨーロッパでも古くから関心もたれていたようです。18世紀末のウィーンで、メスメルという人が動物磁気説を唱えました。これがフロイトの精神分析の源流であることはよく知られています。動物磁気は、書かれている内容を読むと、現在われわれが外気功と呼ぶものを応用するとき生体に流れる気と同じか、あるいは、かなり類似したものと判断されます。外気功を行っているとき、施術者と患者の双方で同時に、手先にチクチク・ビリビリという感覚を覚えることがしばしばあります。メスメルの

時代は、磁気が発見されたときであったので動物磁気という表現は存在し得たのです。フランス王立医学協会を巻き込んだ臨床実験・論争をへて、原因・実態は分からないが、何かそのようなものが存在するということは認められたと書かれています。

この動物磁気論争の中で、ラポールという概念ができたとされています。これは現代でも精神科の医者の間では日常語として使われており、言葉を使わないで患者と治療者の間で気持ちを通じあう現象のことを指しているそうです。メスメルの磁気、治療を受ける個人の磁気、そしてそうした磁気が宇宙の磁気と感応し合って動物磁気による治療というものが成立すると考え、人から人へ移る、感応し合うことをラポールと呼ぶとされています。

ラポールは感覚のひとつで、しかも個人の感覚というよりは人間間の共通感覚というべきものです。ここで思い出すのは、外気功時の施術者と患者の脳波の同調現象です。

脳波のパターンや発生場所が同調することを指しています。

この本の中である分裂病（現在の統合失調症）少女の回想録の紹介があります。母親との会話で、母親から自分の名前を呼ばれたときには認識できなかったものが、「あなた」や「私」という一人称・二人称の会話なら理解できたそうです。三人称になると全く分からなかったそうです。一人称・二人称の関係の場では認識できたものが、三人称という客観化された場では認識できなかったということなのです。アメリカへ留学した始めのうち、直接顔を合わせていると会話が成立するのに、電話では意思の疎通が難しかったことと関係があるように考えられます。

### 感性を工学する

こういった話題は、現代では、科学とは関係はないとされるのが一般的でしょう。ところが、感性を工学的に取り扱って研究してい

る人たちがいるのです。あるとき「感性工学と情報社会」という本が送られてきました<sup>5)</sup>。感性を工学すると、個別性・主観性を取り扱わざるを得ません。主観性の科学の構築が可能かという命題は、21世紀の科学の直面する大問題であり、構築は、従来の科学のパラダイムを根底から変革するものであると書かれています。

#### 文献

- 1) 桑子敏雄：感性の哲学，NHK ブックス 91、日本放送出版協会，東京、2001年
- 2) 池辺義教：医学を哲学する，世界思想、1996年
- 3) 岡野守也：宗教・霊性・意識の未来，春秋社，東京，1993年
- 4) 芦津丈夫ほか編：生命の文化論、日独文化研究所、京都、2003年
- 5) 大沢光編著：感性工学と情報社会、森北出版，東京，2000年

挿絵：夏のホテルのプール

伊豆下田のリゾートホテルのプール。朝から暑くて暑くて、一日中水に浸かっていたい気分の毎日でした。カヤックを車に積んでいたのですが、下ろすのは日の当たる海岸ですから、結局積んだままでした。